

母児間感染ウイルスに対する妊娠適令者 および妊婦の抗体保有状況

(サイトメガロウイルス)

微生物科

井上 睦子 ・ 田中 球英 ・ 石田 茂

佐々木 陽子 ・ 寺谷 巖

1. はじめに

サイトメガロウイルス感染症の臨床像については、今だ不明の点が多くあるが、妊婦が妊娠後期にサイトメガロウイルスに初感染すると脳石灰化等の障害を持つ児が生まれる場合があると言われている。¹⁾

我々は、県内の浸 状況を知る目的で小児並びに看護学生(18~19才)及び妊婦を対象に、間接赤血球凝集(IHA)抗体保有状況を調べた。

2. 材料と方法

小児(0~14才)は1985年1月~12月に病院で諸検査をした残余血清150例、看護学生は1982年10月~12月に採血した100例の血清を検査材料とした。なお、妊婦及び看護学生の検体は、風疹抗体受託検査の残余血清を用いた。

IHA抗体測定は、国際試薬により試供を受けたCMV抗体検出用キットを使用した。

3. 成 績

図1に年令別にIHA抗体保有率を示した。小児では、0~2才が80%、3~5才82%、6~8

才83%、9~11才86%、12~14才90%と加令と共に抗体保有率は高くなっている。

18~19才の看護学生30人は全員(100%)が抗体を保有している。

妊婦20~25才は85%、26~30才では98%で、妊婦全体では100人中91人(91%)が抗体を保有している。

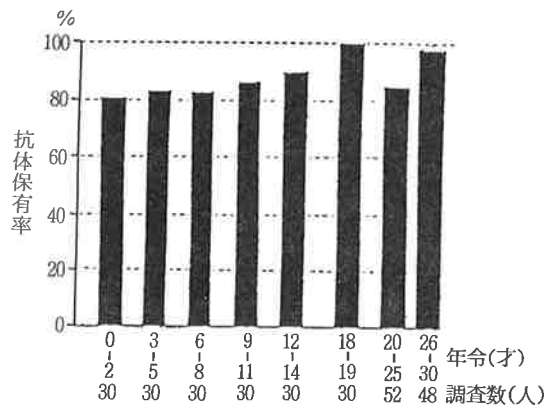


図1 サイトメガロIHA抗体保有状況

4. 考 察

サイトメガロウイルスの初感染は、我が国では産道感染が多く、乳児期からすでに高率に抗体を保有していると言われている。²⁾

欧米では小児期の抗体保有率は低いが、成人で

は我が国のそれと変わらない状況となることから、その間、特に10～20才台の思春期に感染して伝染性単核症様の症患を呈することが知られている。³⁾

一方胎内感染の結果、全新生児の0.5～2.0%が先天性サイトメガロウイルスの感染症を受けるが、感染児の10%以下に巨細胞封入体症(CID)として症状を認めるにすぎないと言われている。¹⁾

今回我々が調査した結果では、乳幼児期の0～2才児よりすでに高率にIHA抗体を保有している。これは、妊婦の91%が抗体を保有していることなどから産道感染によるものと思われる。看護学生(18～19才)が100%抗体を保有していることなどから今後も胎盤感染の起こる可能性は少ないと考察される。

ま と め

小児の0～2才ですでに80%が抗体を保有して

いる。これは妊婦の抗体保有率が91%と高率なと等から産道感染と思われる。また看護学生は高率に抗体を保有していることなどから、胎盤感染の起こる可能性は少ないと思われる。

(本報告の要旨は、第19回日本薬剤師学術大会(鳥取市1986)及び第29回鳥取県公衆衛生学会(鳥取市1986)で発表した。)

文 献

- 1) 千葉峻三：CMVの脳内感染、臨床とウイルス 7、3、50-53 1979
- 2) 河合秀紀他：EIA法によるサイトメガロウイルス抗体の測定、臨床と微生物 13、1、93-96 1986
- 3) 中村健：サイトメガロウイルス感染症、医学のあゆみ 111、13、795-803 1979